

## 動物園における子どものいる家族のエスノグラフィー

### - 動物園にて引き立つ家族らしさとは -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
樋上 沙姫

本研究では、動物園における子どものいる家族のエスのグラフィーを行った。

子どものいる家族は、家族の歴史のなかでも最も凝集性が高まり、家族のライフサイクルにおいて密度の濃くなる段階の一つである。この段階の子どものいる家族の実態を描き、子どものいる家族とはどのようなものかについて考えることには大きな意義があると考えられる。またフィールドに動物園を選んだのは、動物園に訪れた子どものいる家族は、展示である動物の前でさまざまな家族の関わりを行うということで、子どものいる家族を知るために好都合な場所だと考えたからである。

本研究では、動物園は動物の前以外でも家族の関わりを多く誘発させるような場であるのかを知るために、動物園にて子どものいる家族はどのようなことをしている場所であるのかを調べた後、家族の関わりは実際その家族を実現したようなものであるのか、実現したものであるとすれば、その内容とはどのような性質を持っているのかについて考察することを目的とした。さらに、子どものいる家族の、家族の関わりから生じる、相互理解の先にあるものとは一体どのようなものであるのかについて考えた。

個体追跡法によって得られたデータをもとに考察を行った結果、動物園で子どものいる家族は、相互理解が深まるような家族の関わりを行っていること、その家族の関わりはそれぞれの家族を実現したようなものであることがわかった。家族の関わりとは、「違いを認め合い、活かし合うなかで、さまざまな距離で共有体験を重ね、凝集性は変動するが、確固たる一体感を持っている」というようなものであり、これは「子どものいる家族らしさ」を表していると考えられる。

さらに、家族の関わりによって生まれる動物園における相互理解は、自己の深化を生じさせること、子どもの頃の家族で過ごした動物園での思い出はおとなになっても記憶に残り、彼らの子どもと再び動物園を経験することによって、子どもも、そしておとなも新たな家族の関わりを持ち、自己の深化を行うこととなる。